

『不思議の国のアリス』の不安定感について

山内 暁彦

序

ルイス・キャロル(Louis Carroll)の『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*)という作品は、従来様々な解釈をされてきた。富山太佳夫が述べているように、「わが国におけるキャロル解釈は少女趣味とファンタジー・マニアとノンセンス論のいずれかによって、あるいはその組み合わせによって閉塞させられてきた」のである。また、「国と時代を越える永遠の名作という文学的神話」を前提として、誰でも「何かを語れるという気分になるのだろう」とも述べられている。¹確かに、キャロルの作品に接した際に、我々読者は、自分の興味関心に従って何かを語ってみたいくなる。そして多くの場合、「少女趣味」、「ファンタジー」、「ノンセンス」の3つは、欠くことのできない重要な要素であるに違いない。本論でも、「少女趣味」は別として、「ファンタジー」と「ノンセンス」の要素は無視できないものとして取り扱うことになるが、さらに独自の着眼点として、読者に不安定な感覚、ある種の落ち着きの悪さを抱かせる要素が『不思議の国のアリス』にはあるという事実に着目したい。そうした感覚をもたらす理由は主に2つの点にあると思われる。1点目はアリスの身長の度重なる変化であり、2点目は物語の中の個々のエピソードの完結性のなさである。本論ではこの作品を読んだ際に読者が持つ不安定さの感覚を、上記の2点を中心に考察し、作品に現れた「夢」のモチーフを考え合わせることを通じて、この作品が「名作」という「文学的神話」を形成する程の人気を保ってきた理由の一端に迫りたい。

I

『不思議の国のアリス』においてはアリスの身長がめまぐるしく変化する。身長だけでなく一時は体型そのものも変化する。始めのうちの身長の変化はアリス自身によって制御されることはない。何かを口にするとひとりでに体が大きくなったり小さくなったりして、アリスは驚愕するのみである。が、後になると体の大きさはアリス自身によって自在にコントロールされるようになる。体の大きさに変化をもたらすのはキノコのかけらであるが、アリスはそれを食べる量を調節することにより自由に体の大きさを変えることができるようになるのである。こ

のことは、不思議の国の世界においてアリスが成長し、周囲の環境に自らを適応させる能力を得たことを意味すると考えられる。

体の大きさ（サイズ）は作者の記述によってある程度明らかにされている。しかし、体の大きさが変化することを実際に体験するということが起こった場合、本人の意識としてその変化は一体どのように認識されるものであろうか。自分がどれ程の大きさになったかを本人は正しく知ることができるだろうか。第1章においてアリスが「私を飲め」と表示してある瓶の中身を飲んだ時が身長もしくは体型の一連の変化の最初であるが、このときの身長は「たった10インチになった」*“she was now only ten inches high”*²と記されている。10インチという数字はアリスの手元に正確な物差しがない以上、作者のみが知りうる数値であるだろう。ただしアリスは自分が10インチになる前にカーテンの陰に小さなドアを発見していて、そのドアの高さは約15インチだと述べられている。15インチという数値も直接的には作者に由来するが、アリスも実際にドアを見てその高さは15インチくらいだと思っているはずであるから、そのドアとの比較においてアリスが自分の背丈は10インチになったのだと判断したとしても何ら不思議ではない。

しかし、次にアリスの身長が変化する場面においては事情は異なる。アリス自身は自分がどれ程の背丈になったか判断することはできないはずなのである。すなわち、アリスは「私を食せ」との表示があるケーキを食べて体が巨大化し、9フィートの背丈になるのであるが、この9フィートという数値を知ることはアリスにはできない。なぜならば、先程の場合と異なり、ドアなどの身のまわりにある他の物との比較が簡単にはできないからである。9フィートという数字は作者のみが知りうる数字なのである。このように、アリスの身長その時々々の正確な数値に関しては、アリス自身を知ることができるものと作者のみしか知り得ないものが作中に混在していると言える。

更に気になる問題は、アリス自分の身長が変化したと思う際に、自分が変化したのではなく自分の周囲のものが変化したのだとは考えなかったかという点である。アリスが巨大化する際の別の具体例を挙げよう。アリスは第4章では白ウサギの家の中で瓶の中身を飲んで大きくなるのであるが、その際、アリスは自分が大きくなったと考えている。そう考えるのではなく、自分の大きさは変わらず逆に家の方が小さくなったのだとは考えないだろうかということである。人は幼少の頃に目にしていた物を、成長した後再び見た際、それが以前より小さくなってしまったかのように思える体験をするものだ。自分が大きくなったと思うことと周りのものが小さくなったと思うことは相対的なことであり、どちらが正しい認識の仕方だということはないだろう。どちらも同様に起こり得ることである。

『不思議の国のアリス』においては、アリス自身は自分の大きさが変化すると常に認識しているようであり、周囲の事物の大きさが変化しているとは考えていないようなのである。彼女と同様に我々読者も、変化するのはアリスだけであって、他の物や人々、動物たちは変化しないものだと考えている。

もっとも、白ウサギの家の中での大きさの変化に関しては、アリスは自分の身長が大きくなることを瓶の中身を飲む前から期待していたのであり、自分が大きくなったというアリスの判断は自然なものであるとは言えよう。ただ、「人間は万物の尺度」という、ギリシャのソフィスト、プロタゴラスの言葉を持ち出すまでもなく、自分は変わらず周囲が変わるものであると考える考え方の方が一般的ではないかという印象をこの作品を通じて読者は持ち続けることになるのではないだろうか。そして、このような点が『不思議の国のアリス』という作品に接した際に漠然と感じられる居心地の悪さの根底にあるのだ。

先に、アリスは自分の大きさを制御するすべを覚え、不思議の国の世界での身の処し方を知るようになったという趣旨のことを述べたが、やっと普通の大きさに戻れたと思った矢先に、公爵夫人の家に入っていく際、アリスは再び自分の身長を9インチ程に縮める。これは、アリスにしてみれば、自分の大きさを調節してその家の住人の大きさにちょうど良い大きさになってやるという配慮なのであり、同じことを気違いお茶会に加わる直前にも行なうのであるが、読者にしてみれば、せっかく苦労して元の大きさに戻れたのになぜわざわざまた大きさを変えなければならないのだろうかという素朴な感想を持つのではないだろうか。何か、今までの努力が無になってしまったような奇妙な感じがするところである。

アリス自身も芋虫との会話の中で「1日のうちに何度も体の大きさが変わって困る」“being so many different sizes in a day is very confusing” (54) とか「体の大きさが10分と持たないわ」“I don't keep the same size for ten minutes together!” (55) とか不平を述べていたし、芋虫の忠告に従ってキノコを食べ、あごが足にぶつかったり、首だけが伸びてヘビと間違われたり、紆余曲折を経た後によりやく普通の大きさに戻ることができて「やっと元の正しい大きさに戻ったわ」“I've got back to my right size” (64) と述懐していたではないか。更にその前の第4章ではアリスは当面の目標として「もう1度普通の大きさの女の子に戻る」と「あの美しい庭に行く道を探すこと」の2つを挙げていたのである。

‘The first thing I’ve got to do,’ said Alice to herself, as she wandered about in the wood, ‘is to grow to my right size again; and the second thing is to find my way into that lovely garden. I think

that will be the best plan.' (49)

それなのに、先に述べた理由、すなわち、他人の大きさに自分を合わせるといふ理由はあるとは言え、せつかく第1の目的を達成した途端に自ら進んで体の大きさを変えようとするに違和感を覚えるのである。

II

このことは、作品の個々のエピソードの不完結さという問題につながる事柄である。『不思議の国のアリス』も『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-Glass*)も、同様に、アリスが様々な登場人物との遭遇を重ねてそれぞれの国で様々な体験を経るといふ構成になっていて、両作品とも個々のエピソードの集積で成り立っていると言って良いのであるが、個々のエピソードの内容、(あるいはその中で交わされるアリスと登場人物との間の会話の区切りごとと細分化しても同様なのであるが) ある一つの話から浮かび上がってくる問題点が十分な解決をみないうちに次の話題へ、あるいは次の場面へと展開して行ってしまうという感が強い。この点も作品から読者が感じる落ち着きの悪さと密接に関係している。帽子屋のなぞなぞ「渡りガラスとライティングデスクはなぜ似ているか」に結局答えがない点しかり、糖蜜の3姉妹がMで始まるものを描く理由が明かされない点もしかりである。なぞなぞに答がないというのはある意味でノンセンスの極みであるから、ノンセンスを突き詰めた作品としてこの作品を見れば納得できないことではないし、「なぜMなのか」という問いに「どうしてMでは悪いか」との答えが返ってくるだけで積極的にMである理由が示されない点も、特に問題とするにあたらないかも知れない。これに類したやり取りが現実の会話でもあり得ることを我々は知ってもいるからだ。しかし、だからと言って、我々が置き去りにされてしまうという感否めない。何か消化不良を抱えたまま、次から次へと物語が変転して行くようであるのだ。

『鏡の国のアリス』でも同様のことが当てはまる。個々のエピソードは完全な解決のないままに終わってしまい、次々と新たなエピソードが積み重ねられて行く。しかし『鏡の国のアリス』では事情がより複雑であるという印象を受ける。鏡の国の世界では、ジャバーウォッキーの詩に見られるように物の左右が鏡像のように逆転しているだけでなく、事柄の因果関係、すなわち原因と結果が、更には時間の流れまでもが逆転しているという設定になっている。例えば、赤の女王が指をけがする場面では、悲鳴を上げてから出血するのであるし、ライオンとユニコーンのためにアリスがケーキを切り分ける場面では、ケーキを分けた後で切る。(正確にはケーキは自然に切れる。)だが実際には、白の女王の悲鳴を上げる

という行為が出血という現象に先立っているだけであり、これは現実の普通の順序とは逆になっておりこそすれ、悲鳴を上げた後で指から血が出るという順序自体は、鏡の国の世界ではこの順序で生起しているわけである。また、ケーキを分けるという行為が、ケーキを切るという行為（正確にはケーキが切れるという現象）に先立っているだけであり、これは現実の世界で物事が起きる順序とは逆になっておりこそすれ、分けた後で切れるという順序自体は、この世界ではこの順序で物事が生起するのであって逆になっているわけではない。従って、鏡の国では時間が逆に流れているということになっていても、厳密な意味では逆になっているわけではないと言えるのだ。

同様のことは、国王の伝令が現時点で牢に入っていて、来週には裁判を受け、犯罪は最後に犯すことになっているという白の女王の説明にも当てはまる。アリスはこうした因果関係の逆転が厳密な意味での逆転になっていないことに気づいているとも思える。彼女は「どこかおかしい」ということに気づき、女王に問いただそうとする。

*Alice was just beginning to say ‘There’s a mistake somewhere –,’
when the Queen began screaming so loud that she had to leave the
sentence unfinished. ‘Oh, oh, oh!’ shouted the Queen, shaking her
hand about as if she wanted to shake it off.³*

この後、女王は「指から血が出た」と大声で叫ぶ。アリスの言葉は言い終わらぬうちに遮られてしまうことになる。そして、ほどなく女王が羊に変身してしまうことで、この議論は不消化のままに捨て置かれ、話は次の羊毛と水のエピソードへとなだれ込んで行ってしまふ。問題は宙づりのまま放置される、あるいはうやむやになってしまうのである。アリスと同様にうすうすおかしいと感づき始めた読者も、否応無しにこの件は忘れさせられてしまい、アリスショップの店内へと誘われるという仕掛けだ。結局、読者の印象には、漠然とした不安感ないし落ち着きの悪さというものだけが残ることになる。

だからと言ってこのような物語の展開の仕方が『不思議の国のアリス』や『鏡の国のアリス』というファンタジーの作品の欠陥であるとまで述べるつもりはない。あくまでもこれらは元来は子供のために書かれたおとぎ話の類であるので、作者ルイス・キャロルことチャールズ・ラトウィッジ・ドドスン（Charles Ludwidge Dodgson）が論理学の専門家であるからと言って、当該分野の専門書のようにこれらの作品を扱ってしまったのは、それこそ無意味であるのは言うまでもない。むしろ、単なるファンタジーによくも沢山の難解なテーマを作者は盛り

込むことができたものだと賞賛すべきだろう。ただ、賞賛は賞賛として、読者に与える不安定な感覚ないし落ち着きの悪さの原因を考察してみようという意図で作品を読んだ場合には、そうした印象を与える箇所は両作品において枚挙にいとまがないということを指摘したいのである。

普段我々は理論や論理の世界に生きている。『不思議の国のアリス』のようなファンタジーの作品に対しても、無意識に論理的な整合性や、首尾一貫性を求めてしまうということはないだろうか。ところがこの種のファンタジー作品はそうしたものを普通は欠いているものだ。ところが『不思議の国のアリス』には擬似的な論理や、論理的であることを装った非論理が至る所に横溢している。そのことが我々読者の理性に訴えかけてくるのだ。そして我々が理性を働かせて提起された問題を解決しようとする矢先に、話が先へ先へと展開して行ってしまう。こうした事情が我々を不安にさせるということではないだろうか。我々の抱く不安定な感覚は作品に由来するというより、むしろ我々読者の側にその原因があると言い得るだろう。

III

『不思議の国のアリス』のアリスの体の大きさについて更に論じることとする。先にも述べたように、不思議の国の世界のものの大きさは不変であり、大きさが変わるのもっぱら自分自身であるとアリスは考えているようである。それはアリスの主体が確立されていくことと関係がある。一見、体の大きさが変わることは自己の主体が確立していず不安定な状態にあることを表しているかのように見える。しかし、アリスの場合はそうではなく、アリス自らが周りの物の大きさに自分を合わせるという積極的な理由で自分の体の大きさをコントロールするようになったと考えるのが妥当だ。作品の後半全体を通じてその手段となるものは、芋虫からのヒントで手に入れたキノコのかけらである。アリスはそのかけらをおそらくは左右両方のポケットに注意深くしまっていて、都合3回それを用いて身長をコントロールする。それは、1) 公爵夫人の家に入る際、2) 気違いお茶会に参加する際、そして3) 美しい庭につながる小さなドアをくぐる際の3回である。ドアをくぐった後、女王のクローケータラウンドへと至って以後は、アリスが積極的に自分の身長を変えることはないようだ。少なくとも作品の表面からはそのような形跡は読み取れない。

美しい庭へ通じるドアをアリスがくぐるのは作品のどのあたりかといえば、それはちょうど作品の真ん中あたりであることにここで注目したい。自分の身長の変化を巡ってアリスが困難に巻き込まれるというテーマは作品の前半で終わり、作品の後半は別のテーマが中心になると言い換えても良いだろう。即ち、この作

品は大きく2部に分かれた構成になっているのである。作品後半のテーマは、もちろん裁判であるが、裁判の場面で最後にアリスがひとりでに巨大化する際、彼女はもはやポケットのキノコのかげらには見向きもしない。その理由は、もはや体の大きさが中心テーマではなくなっていたこととも関係があろう。アリスはかつてのようにトランプのカードの化身たちや陪審員の小動物たちに配慮して、自らの大きさを小さいままに制御することもできたはずである。だが、もはや彼女はそうすることはない。その理由は、不思議の国からアリスを決別させ、現実の世界に引き戻すという意図で、作者はアリスの体が大きくなるままにさせているからだ、とも言い得るであろう。アリスの身になって言えば、もういい加減この世界の異常さ、不条理さに飽き飽きして「あなたたちはただの1組のカードだ」「**You're nothing but a pack of cards!**」(145)との言明を以て自らの幻想(=夢)に終止符を打つという行為に出たとも言えよう。直接的にはハートの王や女王の裁判の席上での無礼な言動に立腹したことを契機に発せられることになるこの台詞によって、作品そのものに終止符を打たれる成り行きになっている。もちろんアリスが目覚めた後の姉の持った感慨の繊細で優美な叙述があるにはあるが、作品の本体はアリスが夢から覚めるとともに終わると見るべきだろう。そして、夢から覚める直前にアリスは巨大化したのである。先に、作品のテーマは前半と後半で異なると述べたが、これは必ずしも厳密な言い方でないことになる。作品の最後に来て、アリスの身長の変化が再び大きな意味を持つことになったのであるから。

さて、ここで注意しなければならないのは、アリスが巨大化したと言っても、それはただ現実の世界での普通の大きさに戻ったに過ぎないという点である。逆に言えば、不思議の国において、その後半部分全体を通じて、アリスの身長は相当小さかったということ、そしてアリスを取り巻くカードの化身や公爵夫人、鳥や動物たちもそれ相応に小さかったのだということが分かる。作品の後半でのアリスの身長は、彼女がドアをくぐった時のままだとすると、およそ1フィート程ということになる。このドアが作品冒頭のドアと同一の物であるとすれば、その高さは15インチ、すなわち1フィート3インチであるから、1フィートというアリスの身長は妥当な数値であるだけでなく、アリス自身も自分が1フィート程の背丈になっているということを正しく認識することが恐らくはできたはずだ。

するとここで奇妙な問題が出てくる。それは作品の前半と後半の両方に登場する人物や動物のサイズがつじつまの合わないことになっているという点である。裁判の証言に喚ばれる帽子屋であり、三月ウサギであり、ヤマネがそうである。公爵夫人もまたその1人だ。アリス本人の身長の変化は作者によって詳細に語られるのに対し、それ以外の登場人物に関しては十分な説明はないままにされてい

る。ここでその説明不足を補ってみよう。気違いお茶会ではアリスは背丈を2フィート程に調節していた。ならば、帽子屋や三月ウサギもアリスと左程変わらない身長であったに違いない。然るに、裁判の場面では、アリスはお茶会の時よりずっと小さくなっていて1フィート程しかない。証言に喚ばれた帽子屋や三月ウサギもアリスと同様に1フィート程しかないのだろう。公爵夫人はどうか。作品の前半で彼女の家に入る直前にアリスは9インチ程になっているので、おそらく公爵夫人自身も9インチくらいだったと想定される。作品の後半ではどうか。公爵夫人は裁判の前に姿を消すので裁判の場面での比較はできない。その代わりに女王のクローケー場で公爵夫人がアリスの肩にあごを食い込ませるという非常に印象的な場面がある。ここでのアリスの身長は1フィートであるので、公爵夫人もおそらく1フィート（すなわち12インチ）内外だったと想定される。すると作品の前半と後半とで公爵夫人の身長に3インチの差が出てくることになる。3インチは大した差ではないようにも見えるが、9インチと1フィート（12インチ）は3対4の比率になっているわけでありこの差異は無視できない。⁴

このように、作品の前半と後半の両方に登場する人物は、その背丈にかなりの矛盾が見られるのである。この矛盾はどのように扱えば良いであろうか。これは余程注意深い読者でなければ見過ごしてしまうような些細な点だとして問題にしない方が良いでしょう。あるいは、大きさは矛盾している点があるのは事実としても、作品を前半と後半に完全に分けて考えることで、この点には目をつぶるという方法はどうか。更には、アリスのように他の登場人物たちも独自のキノコのかげらかあるいはそれに相当する何かを持っていて、折に触れてそれを用いていると考えるのはどうか。様々な解決策がありそうであるが、注意深い読者にとってはこの件は作品全体の落ち着いた悪さ、居心地の悪さにつながる要因の一つであるということだけは確かである。とりわけ、トランプのカードでなく人間であるはずの公爵夫人の身長が9インチ程であったり、同じく人間であるはずの帽子屋が2フィート程しかなかったり、動物であるに違いない三月ウサギが帽子屋と同じくらいと思われる背丈であったり、また上記の個々の人物の身長が一定でなかったりと、いかにファンタジーの中の登場人物に関わる事情であるとは言え、アリスやその他の登場人物の大きさを巡って、不安定で不自然な感じが常に『不思議の国のアリス』という作品全体に行き渡っていると云わざるを得ないのである。

作中に描かれている人物の身長が一定でないという現象は、ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift) の『ガリヴァ旅行記』 (*Gulliver's Travels*) にも現れている。ウィリアム・エンブソンが『牧歌の諸変奏』で指摘しているように、『アリス』と『ガリヴァ』とは似ているようでもたいへんに異なるものなのであるが、

ここで両者の比較を試みるのも意義があることだろう。⁶ 周知のように、ガリヴァは、住人の身長が通常の12分の1の国リリパットを、ついで住人の身長が通常の12倍である国プロブディグナグを訪問するのであるが、とりわけリリパット国人の身長が一定でないように見える。例えば、リリパットの子供たちがガリヴァの髪の毛の中でかくれんぼをしたという記述や、ガリヴァが広げたハンカチの上で騎兵が訓練をしたという記述をそのまま受け入れれば、リリパット人らは12分の1より更に小さくなければならないはずである。ところが、別の箇所ではガリヴァは、リリパット人もその他の物もみなリリパットは12分の1であると断言している。これは明らかに矛盾しているのだが、こうした矛盾に接した際に読者は『アリス』において感じた不安定感を感じずにすむ。その理由は、『ガリヴァ』においては、12分の1という設定が確固としたものとして存在した上での微妙な誤差として認識されるに過ぎず、リリパットの住人の身長そのものが変化してしまっているとは考えにくいからである。これに対し、『アリス』においては、人物の身長が実際に変化してしまっていると捉えられてしまうのだ。⁵

現実とは全く異なるファンタジーの世界においては、当然ながら、ものの大きさなど一定ではない。このことは夢の中に出てくるものにも当てはまることだ。夢の世界では、見知った人物が突然別人に変わってしまったり、見知った所だと思われた場所が一度も行ったことのない場所が変わったりと、まさに現実離れた現象の連続である。両『アリス』という作品が、その最後は「夢だった」という結末を持つことは、これらの作品の内容自体がまさしく夢と同じようなファンタジーであることを示している。とりわけ『鏡の国のアリス』では、夢というテーマを作品の途中でもしばしば読者に意識させるような書かれ方になっている。例えば、アリスは赤のキングが見ている夢の中の人に過ぎないとトゥイドルディーとトゥイドルダムに指摘される場面や、羊のボートからアリスが灯芯草を摘む場面が印象的だ。特に後者では作者のコメントとして「これは夢の灯芯草なので雪のように解けてしまった」“and these, being dream-rushes, melted away almost like snow, as they lay in heaps at her feet...” (90) と述べられるあたりで、この物語はアリスの見た夢であることが明白になってしまう。この後、ライオンやユニコーンと別かれた後でアリスが「夢を見ていたんじゃないわ」“So I wasn't dreaming, after all” (125) と言うところも、アリスの言葉が正しいかどうかは別として、夢の主題を再度読者に思い起こさせる箇所である。

『不思議の国のアリス』ではこれほど夢のテーマは表面に現れてはいないようである。一方、『鏡の国のアリス』ではことさら作者は夢にこだわっているように見える。これには何か理由があるのだろうか。エンプソンは『不思議の国』は夢であり、『鏡の国』は自意識である”*Wonderland is a dream, but the*

Looking Glass is self-consciousness.”と述べている。⁷ 幻想的な『不思議の国』が夢であることに異論は無いし、それより理詰めの『鏡の国』は確かに過剰な自意識を感じさせるものだ。だからこそ『鏡の国』に欠けがちになった夢(=幻想)の要素を作者は必要以上に補おうとしたのであろう。いずれにしても、両『アリス』はその全体がアリスの見た夢だったと考えれば、人物の背丈が多少変化していても納得が行く。それに対して『ガリヴァ旅行記』は徹頭徹尾現実性というものにこだわった作品である。従って、描かれている人物の背丈の矛盾は、その人物自身の身長の変化としてではなく、作品の設定上の矛盾として捉えるのが正しいと考えられる。設定上の矛盾を矛盾として一旦理解してしまえば、読者の不安感はなくなってしまうのである。

ところで、『ガリヴァ旅行記』は両『アリス』と同じように結局は夢だったとする解釈は可能だろうか。ガリヴァ本人は作品中で再三睡眠を取る。しかし、彼が目覚めた時は依然として当該の国に居続けており、夢から現実に戻るといったことはないようである。フウイヌムの国から英国に戻ったガリヴァは、周囲の人々からは悪い夢でも見たのではないかと思われたに違いない。しかし、作品全体を通読しても、作者の意図としてガリヴァは夢を見ていたのだというようには描いてはいないと言わざるを得ない。ガリヴァの体験は夢の体験ではなく、あくまでも本当にその国に行って帰ってきたという設定であるのだ。もしも仮に、ガリヴァも物語の結末で夢から覚めたという書かれ方であったらどうだろうか。『ガリヴァ旅行記』の諷刺的な旅行記としての体裁は失われ、代わりに『アリス』のようなファンタジーになったであろうか。筆者は、そうはならなかったであろうと考える。あくまでも現実の事象に密着することからくる問題意識を架空の世界に置き換えて提示した『ガリヴァ旅行記』に描かれた世界は、架空の世界と現実の世界とが同居することによってこそ深い意味と衝撃を持つ。従って、覚めたら夢だったという物語の処理は最も避けるべき結末であろうと思うのだ。

結び

『不思議の国のアリス』に接して読者は漠然とした不安定な感覚、落ち着きの悪さを抱くことになるが、このことは、通常のファンタジー作品には起こりそうにない点である。本論では、アリスを始めとする登場人物の身長が変化することと物語の中の個々のエピソードの完結性のなさをその理由として考えてきたが、アリスの身長の変化自体は、この作品の前提として受け入れてしまえば左程大きな要因ではないだろう。むしろ、個々のエピソードの多くが不完結なままである点が、読者を不安にさせる点ではないだろうか。理性や論理の世界に生きる我々一般的な読者にとっては、ファンタジーの作品に接している際も、無意識に論理

的な整合性や、首尾一貫性を求めてしまう。ところが、『不思議の国のアリス』という作品はそうしたものを著しく欠いている。そのことが理性的であろうとする我々を不安にさせるということではないか。理性に対して、感覚や情緒だけでこの作品をもし読み進むことができる読者がいるとすれば、その者は何ら不安定感を持たずにすむであろう。提起される問題を深く考えずに、あたかも夢や幻想が次々に去来するように、アリスの物語が進行するのだと捉えれば良いからだ。本論では、また、両『アリス』における夢の要素について論じたが、その結果、両『アリス』自体が夢に近い特質を持っているという、ある意味で自明の結論にたどり着いたわけである。夢は一旦覚めるとそれは現実の中にいる者の持つ記憶に過ぎない。けれども『不思議の国のアリス』や『鏡の国のアリス』を読んでいる間は、読者は現実に居ながらにして夢の世界に遊ぶことができる。両作品が永遠とも思える人気を保っているとする見方が「文学的神話」であるにしても、その人気の理由は、存外このようなことにあるのではないだろうか。

註

1. 富山太佳夫「ルイス・キャロルと動物の生体解剖（上）」『ユリイカ』（東京：青土社）1992年4月号、75頁。
2. Louis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland* (1865; Harmondsworth: Penguin, 1994) 18. 『不思議の国のアリス』からの以下の引用は全てこの版により、本文中に頁数のみを記す。
3. Louis Carroll, *Through the Looking Glass* (1872; Harmondsworth: Penguin, 1994) 81. 『鏡の国のアリス』からの以下の引用は全てこの版により、本文中に頁数のみを記す。
4. インターネットに「第6章で公爵夫人に出会った時のアリスの身長が約9インチ、そして第9章で再会した時には、1フィートほど。上キゲンな公爵夫人は、その3インチばかりの差は気にしていないみたい…？ あるいは、ふしぎの国の住人たちもまた、ツゴウに応じて伸び縮みできるのだからか？」という記述があり、筆者（姓名不詳）はこれを「蛇足的考察」と称しているが、そうとは言い切れない。<<http://tokyo.cool.ne.jp/casioman/ribon/mts002.html>>
5. 『ガリヴァ旅行記』の縮尺の問題について詳しくは、拙論「ハンカチの舞台の謎 - 『ガリヴァ旅行記』の細部に見られる不具合と解釈の可能性 -」（『言語文化研究 徳島大学総合科学部』第10巻、2003年）を参照。
6. William Empson, *Some Versions of Pastoral* (London: Chatto & Windus, 1935) 265.
7. Empson 257.